とある都市の天才ハッカー

SEED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある都市の天才ハッカー

【Ｎコード】
Ｎ４３８１ＢＡ

【作者名】
ＳＥＥＤ

【あらすじ】
『学園都市』東京の西の山間部を切り開いて作られた都市。そこでは日々学者が生徒たちの脳を研究していた。そして科学で超能力までもが作られるようになっていた。
学園都市の中には都市伝説、裏世界などが数えきれないくらいに広がっている。その中で一人の青年、雨宮　龍徒が巻き込まれていく。雨宮　龍徒はネットの中では「Ｓａｇｅ」というコードネームで呼ばれていた。そして雨宮　龍徒としての自分とＳａｇｅとしての自

分。表と裏。その両方の面を持つ主人公が生きていく物語。

《オリキャラ》《自作ストーリー》《ヒロインが初春飾利》《主人公がチート》

読まれる方はこれらの点にご注意ください。

第1話（前書き）

オリジナルキャラ、特殊能力などが出てきます。

初投稿なので暖かく見守ってください。（笑）

第1話

（ピピピピッ、ピピピピッ）

目覚ましが鳴っている。時刻は朝7時。今日は土曜日のはずだ、なぜこんな時間に鳴るのだろう。

・・・・・思い出した。

「ああ、今日は入学式か。」

体を起こす

「ダルいな」正直入学式なぞ面倒くさくて行きたくないが、行かないわけには行かない。立ち上がりカーテンを開ける。日差しがまぶしい・・・顔を洗い、朝食を食べる。

ここから学校までは30分くらいなので時間には余裕があった。

制服を着てカバンの中身を確認する。といってもノートパソコン以外入っていないのだが、別に入学式だから何もいらないだろう。

そう自分に言い聞かせ家を出る。

駅まで歩いていく途中に昼食のパンを買い、電車に乗る。

電車に乗ると通勤ラッシュの時間帯だからか人が多かった。混雑しているところは苦手なので出入り口近くの窓側へと寄る。過ぎ行く景色はもう春の雰囲気をまとっていて綺麗だ。

「もう春か・・・」ついそう呟いてしまった。

駅に着き、電車から降りると知っている顔がいた。なので声をかける。

人をかき分け近づくとそこには初春飾利がいた。

「よぉ、久しぶりだな。」

「あっ、雨宮さん。お久しぶりです。今年から高校生ですよね。おめでとうございます。今日は入学式ですか？」

「ああ、そうだ。初春は何をしてるんだ？今年は進級だけだから別に何もないだろう？」

「はい。ジャッジメントの仕事の下見です。それで・・・あの・・・」

「うん？なんだ？」

「入学式が終わって時間があるんでしたら下見に付き合ってもらえないかと思いまして。ダメでしょうか？」

「ああ、それなら別に構わないが。」

「本当ですか！」

「あ、ああ。」思わぬ食いつきに驚くと、「ではまた後で連絡しますから！」と言って走って行ってしまった。

「まぁ、いいか。こっちもそろそろ遅刻ぎみだ。急ごう。」

それから学校には無事遅刻せずに登校できた。指示があるまで教室待機と言われたので教室で携帯でニュースを見ていると「新入生の方は講堂に移動してください。」との放送があったので講堂に向かって移動する。

ここ私立梅花学園は私立でそこそこ偏差値も高いので設備もいい、それに超能力開発にも力を入れているらしい。なので講堂は広いし、校舎も大きい。

講堂に着くと、何人かの教員も数人席に着いていた。生徒は3分の2はもう集まっていた。そして全員が揃うと、入学式が始まった。

校長の長い話やこれからのことを説明され、入学式は終了。クラスに戻るとＨＲがあった。サボってもよかったのだが、入学式に出席してその後のＨＲに出ないと後からいろいろ言われそうなので出ることにした。

そして最初は自己紹介。それぞれ自分の名前とＬＥＶＥＬ、趣味などを言っていく。そして俺の順番。

「雨宮　龍徒です。ＬＥＶＥＬ５。学園都市第５位です。よろしくお願いします。」

そうすると回りから「うお。ＬＥＶＥＬ５かよ。」「しかも第５位かよ。すげーな」と色々な声が発せられる。

その中で、気になる奴がいた。名前は狩野　芽衣。能力は空間操作(テレポート)。
全員の自己紹介が終わり。俺はその狩野のところへ向かった。
「こんにちは。俺、雨宮　龍徒。よろしく。」と話しかけた。
「ああ、ＬＥＶＥＬ５の人だよね。よろしく。私は狩野　芽衣。」
「ところで狩野の能力は空間操作だろ？どんなことができんの？」
「う～ん。ＬＥＶＥＬ４だからね。とりあえず普通のテレポートぐらいならできるよ。ところで雨宮の能力は何なの？」
「俺？俺のは電磁侵入(ハッキング)だよ。つってもただの電磁侵入じゃないけど。」
「そうだよね、電磁侵入だけだったら第３位になれないよね。」
「まぁな。」話していると携帯が鳴った。携帯を見ると初春からだった。
内容は『入学式終わりました？今駅前にいるんですけど。大丈夫ですか？』と書いてあった。
「わりぃ。狩野、今日ちょっと予定あるからお先に失礼するわ。」
「急ぎの用事？」
「ああ、人を待たせてるからな。」

「そっか。なら送って行ってあげるね。」

「そんな。悪いよ。」

「ううん。私雨宮君に興味があるから。それに私ならどこでも一緒だし。テレポートで連れてってあげるよ♪で、どこまで？」

「そっか、ならいいけど・・・ 駅前までだよ。」

「オッケー。とりあえず靴履き替えようか。」と言って階段を降りて昇降口へ向かう。

靴を履き替え、昇降口を出ると、「じゃぁ、私の手握って。」と言ってきた。

「いや、肩でもよくない？」

「だーめ。手。」

「分かったよ。」そして手を握って。「じゃ、行くよ。」

と言った次の瞬間には駅前の出入り口横に着いていた。

「さすがＬＥＶＥＬ４すごいな。」

「ＬＥＶＥＬ５に褒められるとは光栄だな～。」

そして初春を探すと、すぐ後ろから「えっ！？」という声がした。

誰だと思って後ろを見るとそこには初春がいた。そして俺たちを見て驚いている。まぁ、当然だろう。俺たちは手を握ったままなのだから。

「雨宮さん・・・どういうことですか？」

俺はこれからどう言い訳するか演算能力をフル活用した・・・

第1話（後書き）

ありがとうございました。ご意見等がありましたらどうぞよろしくお願いします。

第2話（前書き）

2話目です。

ではどうぞ。。

第2話

演算能力もとい思考能力をフル活用して言い訳・・・いや、事情を説明した結果。初春は「分かりました。」と言ってその話は手打ちにすることにした。

腹も減ったので近くのファミレスに入り、昼食を取ることにした。

「ところで、狩野さんの能力は空間操作系なんですよね？」

「ええ、そうよ。」（ニコニコ

「ＬＥＶＥＬは４ですか？」

「知ってるんじゃない。」

「いや、二人で飛べるということは3以上でしょう。」と初春は飲み物を飲みながら話す。

「あのさ、初春。ところで調査の方はいいのか？」

「はい。下見なので時間は大丈夫です。」

「そっか。ならいいけど。」俺は窓を見る。いつもの日常とかわらない。『なぜ、この世界は生まれたのだろう』俺は思ってしまう。いや、思わずにはいられない。自分でもなぜこんな哲学的な事を考えるのかは分からない。

「はぁ～。」ため息。。。

「雨宮くん、ため息をつくと幸せがなくなっちゃうよ。」

「そうだな。」あいまいな返事で返しておく。初春と狩野は息があったのかひたすら話し込んでいる。

そして初春が突然。

「と、ところで。狩野さんは雨宮さんとどういう関係なんですか？」

「・・・」

「・・・」俺と狩野は顔を見合わせる。

「いや、今日知り合ったばかりなんだけど」

「でも、手を握っていたじゃないですか。」と初春は必死に食いついてくる。

「いや、それはしょうがなくだな・・・」

そこで今まで黙っていた狩野が口を開いた。

「フフッ。大丈夫だよ。初春さん。」

「？なにがですか。」

「初春さんの雨宮くんを取ったりしないから♪」

（カァァァ。　ボン！）

「ボン？」不思議な音がしたので横を見てみると初春が顔を真っ赤にして俯いている。髪の間から見える耳も真っ赤だ。

「ど、どうした初春？」

「い、いえ。な、ななんでもないでうす！！」ともうカミカミだ。

「フフッ。つまり、初春さんはね「ちょっ、そこから先は！」きなんだよ。」

「え？途中聞こえなかったぞ。」

「い、いいんです！。聞こえなくて！！そうだ、そろそろ下見に行きましょう！」といって俺の手を引いていく。

「またな、狩野！」

「うん。また学校で。」

そして狩野と別れ、俺たちは大通りを抜けて細い路地に入る。

「ところで、初春。俺がジャッジメントの仕事手伝っていいのか？」

「あ、はい。大丈夫です。下見だけなので、特に問題はありません。それに雨宮さんがいると安心なので。」

「そっか。」

しばらくあるいていると大きい建物が見えてきた。

「ここですね。資料によると何かの研究施設のようですが。」

が、しかし。荒れ果てていてすでに研究所は放棄されているように見える。

「とりあえず、中に入ってみましょう。」と足を進める。

中は予想通り暗く、埃がたまっていた。

「汚いな。二手に分かれよう。俺は二階をあたるから初春は一階を頼む。」

「分かりました。気をつけてください。」

「ああ。分かっている。」

（何もないなぁ。っていうか何を調査しに来たんだよ。）

（ドガァァァァん！！？）

「なんだ！？今の衝撃は？」

俺は走って衝撃のあった一階へ向かう。一階には初春がいる。

「クソッ！！初春！」

一階に降りるとそこには初春が走って逃げてきた。

「初春！大丈夫か？」初春には特に外傷はないが・・・

「やぁ、こんにちは。お二人さん」煙の中から一人の男が出てきた。

「誰だ？！」

「初めまして。俺の名前は霧生（きりう）　創詩（そうし）ＬＥＶＥＬ４だ。」

「私たちになんのようですか！」

「これはこれは学園都市の都市伝説の守護神（ゴールキーパー）じゃないですか。しかし俺が用があるのは君じゃぁない。そちらの方だよ。

「えっ？」初春はとっさに俺を見る。

「ねぇ、学園都市生きる伝説『Ｓａｇｅ』」

「お前、俺のコードネームを・・・」

「まぁね。君には少し手伝ってもらいたいことがあってね。一緒にきてくれないか？」

「いやだと言ったら？」

「力づくでも！！」そういって男は自分の回りに炎を展開する。

「お前発火能力者(パイロキネシス)か？」

「違うね。僕のは紅炎(プロミネンス)だよ！」

そしてその炎が向かってくる。初春は俺の後ろで隠れている。

「ちっ！。戦うしかないのか。」そういった瞬間紅いの炎が直撃する。

「なんだ。つまんないの。」

「なにがつまんないんだよ。」

「は？僕の炎がきいてないの？」

俺の目の前には青っぽい半透明のパソコンが宙に浮いている。

「なんだよ！その能力は！！！」と多少錯乱状態で俺に怒鳴りつけてくる。

「俺の能力は電磁侵入だ。このパソコンで解析、またはプログラミングしたものは現実世界に具象化される。それが俺の能力だ。」

「ちぃ！！」　今度は槍状の炎が飛んでくるがｐｃをカタカタとうちこみ、エンターキーを押す。そうすると槍は自分に当たる少し手前で消え去る。

俺は即座にｐｃに入力をはじめ、次の瞬間には雨宮の手に銃が握られている。「去れ。今なら見逃してやる。」と言うと。

霧生は「アハハハ。すごいね。さすがＳａｇｅだ。リアルの方も強いんだ！またくるよ。守護神とＳａｇｅに合えただけで今日は満足だよ。またね。」

そういって炎の中に包まれるとすでにそこには誰もいなかった。

それから俺たちはジャッジメント第１７７支部の部屋にいた。

初春はあと恐怖にさらされたからか涙目になり。俺に抱きついてきた。そのままだと帰れないので手を握りながら帰った。

第2話（後書き）

めちゃくちゃ長く？なってしまいました。

感想等ありましたらよろしくお願いします

第3話

風紀委員第１７７支部に着くと、そこには白井　黒子がいた。

「初春！おそかったではありませんか。」

「はい、すみません。いろいろありまして」

「あら、あなたは雨宮さんではありませんか。」

白井は俺に気づき声をかけてくる。

「あらあら、手をつないで。お二人ともお似合いですわ。」

「し、白井さん！。」

「まぁ、ひさしぶり。俺はこれから用事があるから一緒には帰れないけど。白井、初春を頼むな。」

「はい。お任せ下さいですわ。」

そう言われ、俺は第１７７支部を後にする。

とりあえず歩き始める。路地などを通り、行き着いた先は窓も入り口もないビル。

そしてその前までくると一人の女性が目の前にテレポートしてくる。

名前は結標（むすじめ）　淡希（あわき）

この窓の無いビルへの案内人だ。このビルは階段もないためテレポーターがいなければ中に入る事も出る事もできない。

「よぉ。ひさしぶり。」

「ええ。ひさしぶり。今日はアレイスターに呼ばれてるんでしょ？」

「ああ、中まで頼むよ。」

「毎回思うけどあなた自分の能力で入れるでしょ？」

「まぁ、めんどくさいしさ。」

「あっそ。」

そう言った後俺はもう中にいた。フロアの真ん中には学園都市統括理事会『アレイスター・クロウリー』円筒の中に逆さまに入っていた。

「やぁ、ひさしぶりだね。学生生活は楽しんでるかね？」

「ああ、まぁな。昨日能力者に襲撃されて毎日がフィーバー状態だよ。」

「そうか。ならいい。」

「昨日のヤツの事は調べておいてくれたか？」

「ああ。調べておいたよ。」そう言うと円筒の横にモニターが現れ

る。

「ああ、こいつだ。で、いったいなんだったんだ？」

「こいつは霧生　創詩は暗部『ブロック』の構成員だ。」

「『ブロック』？こんなヤツいたか？」

「いや、最近入ったばかりのようだ。」

「そうか。で、なんで俺はここに呼ばれたんだ？」

「急遽仕事が入ってね。休暇は終わりだ。」

「分かった。仕事は？」

「ある『研究者』の抹殺だ。それと、学園都市の中枢コンピューターへのハッキング。この二つだ。」

「まて、一つ目は分かるが。なんでハッキングでしかも学園都市なんだ？それにハッキングでも種類があるんだ。目標はなんだ？」

「いや、ただ攻撃を仕掛けるだけでいい。君には簡単だろう？Ｓａｇｅ。」

「ちっ。分ったよ。金は？」

「一つ目が５００万。二つ目が１０００万だ。文句はあるかな？まぁ、君の『Ａｅｒｉａｌ　ＰＣ』と使えば簡単だと思うがね。」

『Ａｅｒｉａｌ　ＰＣ』とは雨宮の能力の一部だ。いや主軸だ。空中に半透明の青っぽいＰＣの事を指している。

「いや、むしろ疑問を持ちたいくらいの金額だよ。コンピューターは最低でもシステム復旧まある程度時間が稼げるようにしてくれ。手段は問わない。」

「わかった。」

そう言うと

（シュン）

結標がやってきた。「もういいのかしら？」

「ああ。Ｓａｇｅ。わざわざ来てもらって悪かったね。」

「いや、これが仕事だからな」

（シュン）

ビルの外に出るとそこには一方通行がいた。一方通行とは旧知の中だ。俺は学園都市に来てすぐＬＥＶＥＬ５になった。その時知り合ったが同じ孤独を知る一方通行だった。それからはずっとゲームセンターなどに一緒に行く中になった。

「一方通行どうしたんだ？こんなところで」

「アアッ？なんだＳａｇｅかよ。ちょっくら野暮用だ。」

「そうか、俺は今から帰るけど一緒に行かないか？」
「なんでテメェと。」
「コンビニでコーヒー飲んで帰ろうぜ。」
「ちっ。わあったよ。」
二人並んで歩き始める。
「そういえば、お前『グループ』に入ったんだってな。」
「アア。そうだ。」
「そうか。お前もまだ暗部の仕事やってんだろ？」
「ああ。」
「何年前からやってんだ？」
「2年前くらいからだ。」
「じゃぁ・・・・・もう、戻れないな。」
「それはお前もだろ」
「まったくだ。」

コンビニでコーヒーをのみ、一方通行とはそこで別れた。
家に帰り。風呂に入り、明日の準備をする。
「明日は学校か・・・」布団に横になるとすぐに眠気がやってきた。

（ピピピピッ、ピピピピッ）
「朝か・・・」
目覚ましがなったという事は時刻は7時だろう。
布団から体を起こし、顔を洗う。
朝食を取り、制服を着て何も入っていない学生鞄を持ち家を出る。
何事も無く学校に着いた。しかし、ＨＲが始まると・・・ 事件は起きた。
「家庭の事情で入学式に来れなかった人を紹介する。入って～。」
担任がそう言うと教室に入って来たのは・・・一方通行だった。
教室はざわめく。なんていったって白髪の少年が入って来たらそれはビビるだろう。
「名前は一方通行だ。」それだけいい。一方通行は教室を見渡す。

「よぉ、龍徒。会いに来たぜ。」とこっちを向いて挨拶をする。

「はぁ～。なんでお前がここにいるんだよ。お前入試受けてないだろ。」

「何いってんだ。俺たちＬＥＶＥＬ５は願書だせば入学できんだよ。テメェもそうだろうが。」

「まぁな。」

「なんだお前ら知り合いか。なら雨宮の隣に座れ、一方通行。」

担任に言われると無言で俺の横に座る。

そしてそのまま授業が進む。最初の授業だからか。みんな戸惑っている。

そんな時、一方通行は横で爆睡している。教師はそれにムカついたのだろうか。一方通行を当てる。

「おい、一方通行。当てられたぞ。」と起こしてやる。

「アア？」そう言って立ち上がり教卓の方に歩いていく。みんなは苦笑いしている。なぜなら・・・みんな分かんないぐらいムズイからだ。俺は普通に簡単なレベルの問題なのだが・・・まぁ、学園都市第１位になら屁でもない問題だろう。

一方通行は無言で完璧な答えを導きだし、無言で席へ帰って来た。

「なんでぇ、あんな簡単な問題。やる意味あんのか？」今の一言はこのクラス全員を的にまわしたようなものだ。

昼休みは屋上で二人悲しく昼食をとっていた。そしたら何人かの女の子がこっちを見ながら騒いでいる。何だろうと二人で見ていると一人の女の子がこっちに近づいて来た。

「あ、あの。雨宮さん。私、入学式のときに一目見て好きになりました。つきあってください！」

といって手紙を渡してくる。それを受け取るともうスピードで女の子の集団のところへ戻っていく。

「お前って意外とモテるのな。」その一言に俺は何も言い返す事ができなかった。

そして放課後。さっきの女の子には丁重にお断りをして今は一方通行と帰宅中だ。

「そういえばお前暗部の仕事あんじゃねぇのか？」

「ああ。あるよ。今日の夜にヤリにいくつもりだ。」

「そうか。手伝ってやろうかぁ？」

「お前が手伝ったら俺なんにもすることなくなっちまうよ。」

「へっ、そりゃそうだ。」

そして家の前で別れ、俺はそのまま帰宅する。

鞄をおき、冷蔵庫の中からコーヒーを取り出す。

「さてと、時間までヒマだな。」

Ａｅｒｉａｌ　ＰＣを出し。ネットを徘徊する。ちまたで世間を騒がせている都市伝説のサイトを見ていると気になる文を見つける。

「『幻想御手』これを使えばＬＥＶＥＬ０がＬＥＶＥＬ４になる事も可能！」

「そんな馬鹿な。そんなもんがあったら勉強の意味ないだろう。」

そしてＰＣをとじ、時間を確認する。時刻は午後８時そろそろいいだろう。

家を出て歩き始める。

向かう先はある研究所。

俺がこれから向かう先にはもう闇しかないんだろうか・・・？

第3話（後書き）

スイマセン。中途半端なところで切れてしまいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4381ba/

とある都市の天才ハッカー

2012年1月14日13時49分発行